

# 仏陀のことば

あたかせ、母が己が独り子を身命を賭してと  
譲るやうに、そのやうに一切の生きとし生け  
る者に對してと、無量の慈しみのいふを起  
すべし

立ちつつと歩みつつと坐じつとも臥じつとも  
眠らぬでいる限りはこの心づかいをしつか  
りととて

心に怒りあらば、顔は鬼となる

## 目 次

就鳥峰 2 号

## ○ 气宇呑五大洲 ..... 3

東心より身延山学生行脚布教  
をたどる

## ○ 感想・行脚に参加して 6

## ○ 法鼓 ..... 11

## ○ 仏教説話

盲龜浮木のたとえ ..... 15



氣宇吞天太淵

衷心より身延山学生に脚布教をたゞて

元日蓮舟齋  
正田直

18

（二）他人回本來の眞の生命を與へて應對する  
（三）自己の眞の生命を發揮する

宗門の生命は、儒學と布教にある。キリスト教  
れも不自憐身命の道徳にもとづかねばならぬ。  
といふことは誤解だない。

十一の道念あってこれらに聖母・布教も活動となり、宗門の生命は躍如として来る。然るに此の道念を日々念々に説き通すことは難かしい。ましてや此の道念の精神によって善惡道を遂行して行くことは更に困難である。  
言つばやすく行うは難じ。ともすれば自己の利害打算が法華經実踐よりも先に立ち、みずか

ら適切な理由を構えて安速に廻して行きかちである。

（二）

然るに身は田行脚布教隊十数名の各自は、学生の身でありながら既に半年も前から、或は小遣りを貯蓄し、或はアルバイトをしてほどを貯用を積出し、世間がお正月気分に醉つてゐる上、いつ時、僅かな冬休みにて廻して競争へ主導らず、墨染の衣に麻の袴姿、半甲脚袋に足をひため、ウチワ太鼓をいれ鳴らして田連行練へむと学の池比叡の峯を起点に、京都、奈良、鶴岡をにして遠く福知山方面へまことに要証は脚の舟登り敢行つた。

（三）

「我れ則ち歎喜す、諸君もまた然なり。かくの如きの人は諸佛の認めたり所なり。」  
「これ則ち勇猛なり。」  
「これ討ち構造なり。」  
「これを戒を持ち頭陀を行ずる者じ名手く。」

「と、いう大聖誕迎年は世尊の御意也。あたがゆ此の行脚布教隊の「二地心地」であるのか。  
今年、私はよわい九十を越えど、この回一札

ほむる事無き節する生門を迎えた。」  
「而して希である。しかし本年あたがゆも大覺大悟正の大運形に相合して、心のことを思ふあわすれば感概一入に嘆くやうだ。」  
昭和三十八年の元日は晴れ。せりつて朝は田行脚布教にてて品力取られたとかはわぬべきを心に。」

（四）

「我等は人の命を守るの事への警戒を擲じ、」  
「六道苦を除く。」  
「我等は人の命を救ひ、」  
「名の無い想ひで、」  
「名の無い想ひで、」  
「無念で、」  
「ボツボツたまらぬかの如きで、」  
「然しあ宜流布の道は、」  
「きびしこ。」  
「一類の流弊はあらわれ、」  
「二類四處に起つて來る。」  
「然しが何を治す事難をあぐつゝ事、」  
「我を云々の無縫と  
「しかし、只今堅持して、」  
「遠慮を燃やし續けて行かれん」とのみを以て祈りたい。

「大聖人ば、」  
「鳥も蟲は逃げじわ振ひぬらず、田連行かねても涙ひまなし。」  
「と仰せられて、」

法華經の故の苦難ならば、大聖人と同じ疾も落ちるであつた。その疾の中から広宣流布の道は開けて來るのである。

（四）

また大聖人は、その涙せきあえぬ中に、「日蓮が慈悲駄大なれば南無妙法蓮華は萬年のほか未來まさも流布すべし」

とも

「広宣流布は大炬的とするべし」

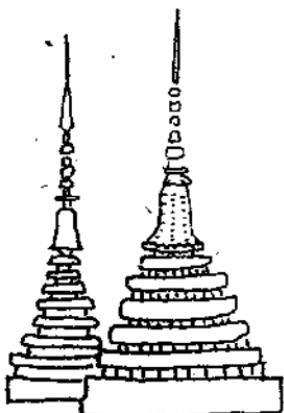
とも仰せられてゐる。大聖人の御一念の中には、既に広宣流布の天業は確立されていた。

六老僧曰持上人が滿蒙の果てまでも遠く行脚布教へ來立つていつたのも、大聖人によつて完成された此の御一念の中の所作であつた。広宣流布は身命を惜しまぬ一步々々の歩みである。裏教宣令の一歩々々は大聖人の御一念中の歩みであり、またその一歩々々の中には宣流布がある。

されば私は諸師等の上に祈る・裏教行脚の一步々々の中に「般舟併呑五大洲」の機縁のみなきられない」とぞ。

今化の佛弟子たるの使命を覺悟して、心をもとめ、ますく「日蓮自愛、健闘」して御意して宗門有為の法器となつて頂けん。

御本綱下に大要以上述べられ、併して去り行く布教隊の最後尾の者が妙顯寺の門を出て見えなくなるまで、寒風吹きすぢふ大玄関」上に止れたまゝ、何時まさむく仰尊つて見送られた。



想

# 一 行脚に参加して――

京都より一緒に行脚下さった奈良市正露日会員の方々、及び大阪の坂東さんから  
られた感想文です。尚、原文のまゝ記載させてもらいました。

立正露日会青年部画 小学五年 遺仁仁

感

行脚布教に参加をつづいたたごと  
うつもありがむかへてしまひた。  
げくせ、まだかじらるので、なにも  
わかりませんが、お上人とまかたの、すがた  
をみてものすゞぐりつぱたかと思ひました。  
おえい口の、布教のじきは、ほくせすぐつて  
トロヒつまうまつせが、あとで、せくば、そ

ふたりとも、しゅせんの、つがいがつがい  
そりあへる口、酒がん寺の口で、かなしみ  
られたすかだをみて、お上人やまがたは、ねち  
いなと思ひました。じんじの春の、うしきう  
金口は、はやくござたくてたまらません。  
いたとせば、せようしゃくねがいしたします。  
わよりなう

## 行脚布教に参加して

立正露日会青年部画・高校三年

坂脇幸子

空いた里が運びこむ頃、市ヶ谷駅の辺  
の「赤葉クラブ」へ集合した。

私達は街頭布教に参加する私達の不安を取り去  
ってくれるかの様」、初対面とは思えない程  
優しくお話をしてくれました。そして、ねじ  
じして複数なり、と無言の言葉を私達に贈つて  
下されたのです。

十一時近く、比叡山へ着陸しました。

バスで行く途中、「左側」見えた琵琶湖の岸々  
七しお姿は、私達の前途を祝福してくれてい  
るかのようと思へた。

比叡の山は真白い雪。その新雪を一步々々  
踏みしめながら、以前の轟轟が、ああ  
参加してよかったです。じつに雪と空に  
方向転換しました。  
根本中堂は仏教大師の教え「仏教の要素があ  
つた為御堂の中は、薄暗く、私達は一歩の隣  
中堂から下りかけた。一段と雪が深くなり  
北风は容赦なく、水の蒸氣のかたい雪と共に  
強く、冷たく、私達の顔を打ち手袋をつけ  
ていない手は感覚がなくなつて、顎は寒くな  
つて来る。けれど我々若者のもつエネルギー  
北风は容赦なく、水の蒸氣のかたい雪と共に  
強く、冷たく、私達の顔を打ち手袋をつけ  
ていない手は感覚がなくなつて、顎は寒くな  
つて来る。けれど我々若者のもつエネルギー  
北风は容赦なく、水の蒸氣のかたい雪と共に  
強く、冷たく、私達の顔を打ち手袋をつけ  
ていない手は感覚がなくなつて、顎は寒くな  
つて来る。けれど我々若者のもつエネルギー

もあつた。

滑って列から転げれば、皆林に倒れてしま  
う山を下りました。

「本当に這樣困难な所に着きました!」

やがて暖は日に焼き固めがてらあれどいいす  
る頃私達は本館につきました。

彼等十九名の歩き疲れた顔の頬々から汗が  
在得たようなパラ色の明るさが街の燈影の中に  
匂ひ立っていました。

そして、今夜の宿である漢廟寺で今日の疲れ  
を取り、明日への布教の備え「十二分の睡眠を  
とった。

その露店は満足感に満ちてござつた。

六日の日比山は激しく厳しく寒さであった。

しかし奈良県に至るたる布教を展開し、日連大  
上人の在りし日のお姿を思いしがれ、南無妙法蓮  
華經と二百余名が一時に唱えた心とどが眞体  
同心となつて強く結ばれ、これが即ち太鼓の響  
きは、まさに天」といつを胸をゆるがし、文字  
通り言葉通りの大行進であった。

雄々しい姿の学生やお達の辻説法、そのお詫の  
中には若いが信者である私も反対し、後悔せ  
ざるる言葉がありましたが、とにかくこの時既

ど私は心靈感動のものに吸込まれたといふ  
はありましんでした。

田中向といつて相向ではあったが、毎日う  
れじやと感激に一日々々を送つて来ました。

最初の日、皆様と別れるのが悲しく、田中  
向の称な日が毎日だったらどんなだろうと思  
い、吉林との再会の日を夢み、念ひながら別  
れを惜しんだのでした。

昨年の行学講習会の感激に新たな感激を味  
わつて、これから松達青年の使命が如何に  
重大で且つ難かしいかをあくまで得ないと  
同時に一生懸命れ得ぬ感じ出しつゝ、この短  
期間に發揮したいくつかの教訓を身にもつて  
「元」もつて信仰「弱みたじ」と思つてしま  
す。  
今後もよろしく御指導をお願いいたします。



## 井川 言法

立正靈山会青年部員 大学二年  
標本蓮子

「一人の心なれども二つの心あれば、そ  
の心たがいて成す事無し。百人千人なれ  
ども、一つの心なれば必ず事を成す。  
日本國の人々は多人なれども同体異心な  
れば諂事成せんこと難し。口達が一類は  
異体同心なれば、人々少く候えども大事  
を成じて一定法華經弘まりなんと覚え候  
時は強けれども一善に勝つことなし。  
たとえは多くの火集まれども一火に消え  
ぬ。」の一門も又かくの如し。

(異体同心事)

### 南無妙法蓮華經

この度の大仏事に靈山会より青年五人が参加  
六廿二日(大正十二年)、日高上人始め、身延山靈山会  
の諸上人様方の異体同心・謹法と云ふ御禮のた

め「身命を惜しみぬし」とおなじを、田のあた  
りし頃せていたとき、深く感動すべし井辻・私  
達の心・そして信仰生活を反省しております。  
高野と吹雪の中を太鼓を打ちならし、その音  
の振るふることなく、横川の定光院へ着き・大聖  
人の御像に迎へられた時のあの感激!!  
奉行の一生を送られた元政上人の元政庵瑞光寺  
・印度へ行かれる立本寺の一尊四臂像・そして  
雨の中、九十戈の「老体」と「病臥」のお体で私達  
を涙と共に見送つて下さった妙蓮寺の山田四真  
上人のお姿・又六日には延々二、「三百人の頭領  
行進とお上人様の熱烈な辯説法。」  
の夜の徹夜の座談会等、私達の感動は教限りな  
く多く、とても紙上には書き尽すことは出来ま  
せん・その中で私達はある晩の冷たさ、吹雪の  
痛さの中の修業、その修業そのものが布教であ  
ることを、又大聖人の言われる異体同心の心と  
は何かを、私達なりに争ひ得たような気が致し  
ます・「これかくは」この体験をしてまでも忘  
れまいとなく生活の中に生かし、唱題によって  
心を磨き、広宣流布のお手伝いを少しだやせら  
せていただきたかったと思つてあります。お上人称  
方、どうもありがとうございました。

## 大法師

一月九日

書は此のたびの大佛事に私も加えて頂きました  
延山にお参りの」と、存じ上げます。

誠に光榮出でられました。  
新番耳々の「」の大仏事に私も加えて頂きました  
「」を何とお詫申し上げてよろしくやや遅めな  
御用もなく、たゞ法鼓を打つて御<sup>御</sup>お詫申  
し上げました。

もし出来るにしなれば、あのまゝ歸る。ただ  
ないでおくれ、じつ迄も「」の状態を保たたいと  
念じました。それはやはり無理で、すべて眼  
前の「」とはじんぐ變つて行くようあります。  
たゞ今の時の「」とは心中にのみ、今もはつき口  
と無い出でれます。

宿舎の「」に優しく御親切が忘れる「」  
とが出来ません。又法事をむれほじ御大師に  
送はしておいかか、我心にもほわって、だん嘆  
く意乍ら礼拝申上げておきました。

「」の素晴らしいお年五を放せずして一生革命大  
切に育てて参りましょ。

色々と御心配をお掛けしたよりますが、

我が不穏が恥かしく思われます。

悪しからずお許し下さいませ。

やがて困った者だとお思ひになられたいひやつますが、お見捨てなくよろしく御指導のほどお願ひ申し上げ、今後共よろしく願えます。  
皆様の神社所をお聞きしてじなかつたものですが  
から、お祓状お出し出来ませんが、お上人様よりよろしくお詫申しあげて下りませ。  
皆様のお德を十分に与えて原キモして有難度(アリ)いほした。深く感激しております。

今日から我祭り、身動きも出来ません。

福下下さい。心地良しかばで行きます。欲頗ばかりです。私もその一人です……。

今度は少しだいいん直しておこしてお口こまし  
よ。

二、三日中「神戸へ行きお佛舍利塔巡り促進のための御祈念に参加せねばとお忙じております。向に行けば一日五時間、六時間は歩きく覚悟が必要です。

まことに足が太くなりますが、  
でよいの身を失礼します。  
遙かに御自愛をお祈りしつゝ皆様によろしく又  
の事を楽しみにお待たします

金掌





# 法鼓

大學一年 川島虚齋

文明の利器をいやじこつ程まの物に見る現代に  
七百年の昔の日蓮上人鎌倉辻説法のお姿をしのんで  
一の様な譽采の衣「手甲脚絆・天台笠・わらうぱ  
き」という格好を見た時、信仰の有無を問わず人々は  
現代僧に対するある種の時代錯誤を感じ、その頭の中  
を疑つかれないので、教十丁の大鼓はあらゆる機械  
や素物以上の聲音を感じさせるのであつて、  
しかし本書は二の姿、二の大鼓の大音響をもつて  
行進を続けて止まない。

×

現代をみると一般人の頭以上に機械の発達は驚く  
べき速度をもつていて、それら機械の根源となる自  
然物の偉大さに人々は我が身を忘れて「物こそ全て  
なり」の唯物思想を「おち入る」「これは今」始まった  
事ではない。古今の思想は絶えないと近世は特に  
物質文明の渴む「おち入つて」いる感が強い。

しかし皆さん、人間自身の精神の発達があつたか  
うこと文明文化が栄されたのです。人間精神の向上

が機械の利用価値を高め、政治、軍事、文藝、宗教、教育等、文部等の正統な精神が人間をして方物の  
尊長と同化したのです。人の価値をオーラ認め  
得ずして眞の文明はあり得ないのです。

「（）我々は」の古風な姿をもつて人間復活と  
も言ひべき、皆といふ言葉を想起し、久しく遠い

人間精神の流れをかえりみて欲しいのです。  
金に執着する人、家に執着する人、食物に執着す  
る人、すぐ「（）」その物欲をお消しなさい。二の世は  
それらが全てではありません。迷惑な欲望はすぐ  
無くなる事です。正しい心をもつて物を見、考へる  
事です。正意の生活を送らねばなりません。され  
ば中に入れる米も一滴の味噌汁も生きて来ます。  
感謝とは他人に感謝するだけではありません。

我々を生かすあらゆるもの、その中に生きる自分  
自身への感謝です。生きる事への感謝、生かさ  
れるものへの感謝が心の平和をつくり、一人一人  
の心の平和が社会、國家の平和をつくり出します

物への執着は、生活を破壊する元である」とをお  
考へ頂き、日々の生活をより良い有意義なものに  
して頂きたいと思します。

×

次に「天」も通するかの呪縛太鼓の大音響に対する

る御理解を望み、お申しますと、太鼓は印度、中国を経て日本に伝来した仏教徒のもので、祈りや感謝の詞を神社にさし、又仏道修行をする際の心を高めかつ統一せしむる楽器ともいひべらゆのであります。殊に「我が宗ではお題田修行」用いますので良くなりられていますが、では如何様の効果・功德があるのでしょ。

その大音響ははらぬ、聞く人にモレ心に何か響くものがあり、「絶」なつての題田を唱えようとする衝動にかられます。それで誰人も生れ乍ら「持つ宗教」に対する喜びとモレ申しあしますが、仏教語で云う「仏性」をあらわすのです。更にそれは法界全体に及び遂ての靈應を發揮の趣く説じます。

言語は通じずとも日本山妙法院の巻井日蓮上人の如きは、かの印度獨立のオ一人者ガンジーに「私の墓前にて太鼓を打つてくれ」と云ふのまれ、その教える所を問われ感歎せしめ、また題田修行なる靈験宣令の功徳により道場建立をなしとて迷てる人々を導き抜いた栗原は後を失たません。

釈尊の在世当時をはじめ、世の中の比較的穏やかな時代には「人々々々」説を示しても充分な事と思します。しかし文明文化の発達は人々を時間と機械に追われる間にせわしい單体に引き入れてしまふ。こ

の中で一人一人に教えを説いてもそれを聞く体制が備いません。そこで我々は」の太鼓の音律をもって人々の注意をひき、「この聲をもつて信仰心を目めぬやすのであります。「太鼓」依つて衆縁を結ぶ」と申すものであります。

× × × ×

仏教では宗教的「みだ靈應人格者を「丈」と称します。死んだ人在仏と云うのは誤まりです。この仏は印度に出現し覺りを開き人々を導き教つた釈尊のことであります。その釈尊はひんた看でも必ず仏になれる性質つまり仏性をもつてしてその心構え、行い次第でいつでも仏になれる」と説き、人間の本質が平等である事を明づかしにしていますから、民主的な思想は今にはじまつた」とではありません。これはキリスト教等「説かれろ神と人間の關係とは全く異なつた身近な教えです、食物を得る事ができず、空腹」などく思いをしている人に、「可愛やう」と、「れをむ食べなさい」と差し出す慈悲の心はそのまゝ、仏の心です。この心を全ての人がよく持つことが出来れば文句なく」の世は極樂淨土に至るし平和な社会になります。しかし文明文化の発達は人々を時間と機械に

すればよいのでしょうか。それは「この教えを信奉する」とことです。その教えを承認は異口同音なたとえをもつて順々に説いていますが、数学や物理学の定理のよう「紙上」で理論立て書き塊わす事は不可能です。それで不可思議な教え、「妙法」と申します。たとえよつもないが、仮にたとえてみれば、泥沼に美しく咲く「蓮華」のようなものであり、それは天地を「「縛り無限」」ひうがる教えを「「経」」といいます。

私達がその教えを持って仏の称な人格に立てるよう努力することを「「開業」」といいます。ですから南無妙法蓮華經を唱える事は實「「不可思議な事」であり深い意義を持つことです。「「一」」の七字はどんな意味でどんな功徳があるんだ？」と質問されても一言答えられません。簡単「「答えられる教説の公私の如きものではない」」のです。皆さんが良く御承知の「「紙上甚深微妙の法は……」」の開業儀を真似されれば幾分の解答を得る」ことができます。

過去に多くの人々が「」の題目と字を信じ唱えて教わった事実を知り、我々も信じて唱えてみない事には致しません。しかし仏の正統な尊い教えである事だけは異論がありません。

私達が「」の御開業日を早々と時「ロ・机」「向つたそ」「」で唱える対象となるもの「本尊」が必要です。この本尊となるべきものを承認は「久遠完成の本仏」と説いています。

曰蓮聖人も「久遠完成の本仏」を本尊とされ、そうしなければならないと宗教的に明らかにしています。  
「久遠完成の本仏」とは久遠の過去から、永遠の未来へと我々衆生を救済し続いている本業の仏の二ことで、印度で仏事が王子として生まれ出家し覚り仏陀世尊となつたのは、仏が人間とか離れれたものでないという証拠に方便の姿をもつて人々を導いたのであって元々は久遠の過去から仏であつた訳です。

「」の本尊「本仏」を形「表わす時仏像仏画となり、又本仏「法界が統合した形を紙上「墨書き」表わした十界大曼荼羅ともなり、その大曼荼羅の形象化ともなるのです。

「」の本尊を安置して共々「題目を唱える所を「法華經の道場」と云い、寺院・教会などがそれあります。ですからとえ道場があつても

御題曰を唱える人が集まらねば有つて無きが如しで「黒用の長物」となつてしまひます。身になれば事は一箇々々の運営の中にある。すと完全にはなり得ません。そのため心と一体の境地となつて然るに御題の神ひを他の人々に及ぼし、更にその功德を悉くする人を教へ者を「菩薩」といふ。その行いを「菩薩行」といいます。

人間が生れた以上誰でも喜・地力をがれ取り  
そして権力を欲しいがまゝに行使する。又でも  
まだ自分は樂に生きようとして我欲にとりつかれ、その満足をもつて価値ある人生としづぶ  
きます。本当の人の間の価値はそんなものではありません。菩薩の様にあらゆる人に慈悲の暖か  
い心を握しのべて本当に力になつてやりしかも決して高慢せず、自行の努力を止めない。そん  
な人間になる事です。

苦難行を端的に表現した有名な文章に詩人であり法華經の精神に生きる宮沢賢治の「雨ニモ  
マケズ」の一節があります。中学の教科書で読んだ二の短文を再び改めてかみしめ味わい読んでもちしちつ。

皆さん、開成セオニーの回題としてます一心に  
南無妙法蓮華經を唱えて下さい。真心と祈りの  
「一もつた一遍の難田は万難を除め、又一遍の難  
田は我と人と「愛と眞」をあわせた生き」がいを与え  
てくれる幸でしょ。

何々教団の一員として、とか何々寺の信徒と  
してどうぞ夜い心にとらわれず、太鼓の大音響  
と共に「宇宙の中」化を浴かし大音量で下  
さい。

喜びも悲しみも回題田の唱えで必ず法華經の  
心をもって、皆共に「仏道を成すべ」と左耳に願  
つむのをあります。



# 仙教説話　浮木のたとえ

ふるくから仙教に伝わるたとえの一つに「亀龜浮木」と稱てらるるものある。そのたとえを仙教はこのように説いている。

「此丘たちよ、たとえば、ここにひとりの人があつて、輦を大海に投じたとする。そして、その輦には、一箇所だけ孔があいていたとある。しかるに、ここにまた一足のあぐらの亀があつて、百年に只一度だけ、海面に潜んできて首を出すといふ。その亀が、海面に浮んできて、その輦の孔に頭を突きこむといふやうなことがあるにろうか。」

「大徳よ、としそうにう」とがあるとしても、いつのことかわかりません。」「此丘たちよ、その通りである。だが、百年に一度だけ海面に浮かぶ亀龜が、輦の一孔に首をいれる」とよりも、なる希有なることがあると知らねばならない。それは、一たび黙しきところに墮ちたるものが、ふたたび人身を得るということは、さうに希有であるということである。

その言葉のこころと、後代の仏教徒たちは、ハギのよくな徳をもって表現し、今日に到るまで、唱え続けている。

「人身うけがたし、今すでに愛く。　仙法あいがたし、今すでに聞く。

この身、今生において度せずんば、　いづれの生においてかこの身を度せん」  
 わたしどもは、いま人間として、この世に生を受けている。このことにも、あた  
 おろそがなことにあづきと考える。そこからぬじめて駭張した人生のいとぢが  
 生れてくる。わたしどもは、わたくしの世に生れて、仏陀の教えとその垂範をし  
 ることできただ。じつことわたり、おれに希有のことであると考える。そこから  
 はじめて、仏教徒としてのいとなみが展開してくる。それらのことを語り、  
 冊に録じしめようがために、仏陀は、ここに真龜の大海上の浮木の乳に誓っている  
 ものと希有なりとして、  
 ものとにうしきるだじえ

就鳥峰　オ2号

・昭和廿八年三月十五日發行　編集印刷就鳥峰会  
 ・山梨県南巨摩郡身延町久遠寺  
 と詠かれたのである。